



安らぎの

里

川崎ゆきお

「どういうときが安らげますか」

「いい感じにいるときですか？ 場所とか？」

「はい、それはどんな条件でも構いません。あなたが一番安らげるときを教えてください」

「ゲームをしているときです」

「遊んでいるときですね」

「誰でもでしょ」

「でも、遊んでいても安らげない人もいますよ」

「それはあります。ゲームを楽しくプレーするには条件があります」

「ほう」

「ゲームさえしていれば安らげるのかといえばそうではありませんし、ゲーム中も、安らげないこともあります」

「単純な話じゃないのですか」

「まずは体調が悪いと、だめです。体調を整える、これだけでも実際には日々細々としてことに気を遣わないと、なかなか整いません。いくらゲームが安らげるからと言って、でも結構体調が悪いときでも、ゲームは何となくできます。まあ、気晴らしでいいのでしょ。横になって休憩しているより、いいです。そうして体調や気分が悪い時間、下手なことをするより、過ぎゆく時間で解決していくものです」

「はい、続けてください」

「ゲームは特に成果はないのです。現実的に。だからいいのですよ」

「無為な行為が安らげると」

「これはゲームのやり方にもよるのです。私の場合、ペースですねえ。自分がリードしているかどうかです。これはライバルなどとは関係ありません。この場合のリードは、相手より強いとか、弱いとかではなく、思っている通りに進んでいるかです。想定通りに進んでいるかです。順調に進んでいるときは安らげます。全て上手く行っているわけですから。いい時間を過ごせます。自分が主導権を握り、その読み通り進んでいるからです。自分が仕切っている時間です。これがいいのです」

「そのリードが、安らぎをもたらせるわけですね」

「安らぎと言うより、安心してできます。安心感、安定感のようなものでしょうか。そういう流れに乗ったときですがね。そこに乗せるために、色々と創意工夫をします」

「安らぎの里があるのですが」

「来ましたねえ」

「ああ、はい」

「しかし、話の流れに乗せないで、かなりいきなりですよ。もう少し段階があるんじゃないのですか」

「すみません。乗り損ないました。だからもう我慢できずに用件を切り出してしまいました」

「何でした、その」

「安らぎの里です」

「年寄りが老後送る施設のことですか」

「違います。まあ、短期の別荘レンタルのようなものでして、自然豊かで、山川も近く海も近いです。湖もあります。自然は豊かです」

「要するに人があまりいない田舎なんですね。平地がないので、開けていないような」

「住むには何ですが、一週間二週間、その程度なら、恵まれた環境です」

「安らげますか」

「黒潮に面していますので、気候も穏やか、温暖な土地です。まあ、温泉も、少し遠いですがあります。従いまして逗留気分を味わえます」

「いるんでしょ」

「はいっ？」

「いるんでしょ」

「幽霊はいません」

「そうじゃなく、お金」

「ああ、はい」

「それを聞いて、安らげなくなりました」

「分割可です」

「ほう」

「月々千円から」

「なるほど、いいところを突いてきましたねえ」

「そうでしょ、それで、一週間でも二週間でも逗留できます。別荘を持っていても管理が大変でしょ。月に千円なら、安いものです。まあ、レンタルですから、自分の別荘じゃないので、手間はかからない。また、家の修理代もいらない。固定資産税もかからない」

「あなた、今いい感じでしょ。安らいでいませんか」

「はあっ」

「あなたのリードで島田もゆれるですよ。リードしているから楽しいでしょ」

「ああ、まあ」

「それが言いたいのです。ゲームもそうなんです。自分の思うようなペースに填まったとき、安らげるのです」

「ああ、なるほど」

「しかし、私は、それには乗りませんから、結局は断ります。残念でした」

「ああ、気分が良かったのになあ」

了